

THE BIG-O

Act 7

The Call from the Past

Version 2.0

小中千昭

Animation Play by Chiaki J. Konaka

1999/04/26

登場人物

ロジャー・スミス(25).....	ネゴシエイター
ノーマン・バーク(54).....	ロジャーの執事
R・ドロシー(18).....	アンドロイド
エンジェル(25).....	謎の女
ルネ・リゲッティ(39).....	海産物仲買人
老いた漁師	
ポール・リーダーマン(34).....	船舶製造業者
インスマス面の男達	
アレックス・ローズウォーター(43).....	パラダイム社主
海坊主(メガデウス)	

古いオフィス

床が傾いている。

それに伴って、雑多なものが部屋の片側に堆く積みまれているが、机類は床にボルト留めされているらしい。

窓の外は限りなく黒に近い青。

そして、その部屋にはロジャーとエンジェルがやや離れて座っている。二人とも疲れた顔。

エンジェル、煙草をくわえ、火を点けようとすると

ロジャー「わざわざ部屋の空気を汚す事もあるまい」

エンジェル「苛立たしげ」気分の悪い空気に我慢ならないから吸うのよー」

ロジャー「（冷静に）この部屋に空気があつたのは小さな幸運だった。しかしいつまで保つか判らない」

エンジェル、一口吸い、忌々しげに火を消す。

エンジェル「いったいいつになったらここを出られるのよー」
ロジャー「……」

ロジャー、窓外に目をやる。

その外側は

海中の摩天楼街

埋没したロウワー・マンハッタン。薄暗い水の中に佇立する墓標の様なビル群。

その窓の一つの中に、ロジャー達がいる。

ロジャー「（オフ）私と、天使の名を騙る女がここに二人きりでいるのは、決してハネムーンではない。

話は三日前に遡る」

アウト・オブ・ドーム／海鮮市場

グリフォンで乗り付けるロジャー。

市場は閑散としている。

ガランとした構内。その入り口の軒先には、魚の骨を束ねた呪い除けが吊られていた。

ロジャー「」

仲買人事務所

くたびれた小さなオフィスで、イタリア系の太った男と対峙しているロジャー。

リゲッティ「魚を値切る様な交渉もするのかね、あんたは」

ロジャー「正当な依頼があればだ。この二週間、魚の価格が異常に高騰している。ドームの外の住人に合成シリアルしか食べるなどでも」

リゲッティ「(手で遮り)売れる魚が無いんだ。価格操作しているのは小売りの連中さ」

ロジャー「魚がとれなくなったと?」

リゲッティ「魚はいるさ」

窓外を促すリゲッティ。

小さなビルの窓の向こうは、埋没した摩天楼街のトップが僅かに覗いている、海。

リゲッティ「この岩礁の多い海の魚を食い尽くすには、三千年は掛かる」

ロジャー「じゃあ何故」

リゲッティ「魚を穫りに行く者がいないのさ。漁師が海に入るのを嫌がってる。いや、怖がっている」

ロジャー「何を」

リゲッティ「(首を竦め)海の神が怒っているからださ」

傾いだオフィス内

ロジャー「(モノ)海の神が怒っている、仲買人の男はそう言っただ。確かに、この海は静かな怒りを湛えている」

トントントン、目を上げるロジャー。

エンジェル、爪を机に無意識に叩いている。

ロジャー「
エンジェル」どうするつもりよ。このままここで飢えて死ぬな
んて、あたしは絶対に御免だわ」
ロジャー「飢えの前に、酸素が無くなる方に賭ける」
エンジェル「（苦笑）賭けにならないじゃない」
ロジャー「君が本当に天使なら、天国で払って貰えばいい」
エンジェル「（チラとにらみ）ホントに鼻持ちならない男ね、
ロジャー・スミス。死んでまで善人面しようって訳」
ロジャー「（モノ）勿論、私だつてこのまま死を待つだけ
でいるつもりは更々ない。しかし、この女が近く
にいる限り……」

ピア

板場の棧橋。

閑散としたそこを歩くロジャー、座り込んで網を
直している老人を見つけ、近づくと。

ロジャー「（明るく）漁に出なくても、手入れは怠りず、か
目上げるだけの老漁師。」

ロジャー「海の怒りって、何です。何を畏れているのですか」
老漁師「

ロジャー「（モノ）老いた漁師から話を聞き出すまでに、たっ
ぶり一時間はかかった」

夜の海（イメエジ的に）

スカイスクイパーの頂きが顔を覗かせる、墨を流
した様な漆黒の海面。
その深部より、淡い光が一つ、二つ、まるで
死んだ者の魂が帰るかの様に。

夜のピア（イメエジ的に）

霧立ちこめる人寂しい夜の棧橋。

ペタリ……ペタリ……ペタリ……

水を滴らせながら、複数の歩く音が聞こえ

霧の中よりシルエットが浮かぶ、異形の者達。

それはまるで、インスマスの……

ロジャー邸／ロジャーの部屋

砂時計の一つをひっくり返すドロシー。

もう幾つもの砂時計をそうしていた。

ノーマン「（オフ）ふう、やれやれ……」

ドアの方を見るドロシー。

黒ゴム・エプロン姿、顔に機械油をつけたノーマンが、慌ただしく通過していくところ。

ドロシー、関心を失い、窓外を見る。

鉛色の空の下のアウト・オヴ・ドーム。そしてその南の果てには

傾いだオフィス

苛立たしげに歩き回るエンジェル。室温と湿気で

汗が額にまとわりつく。

エンジェル「（小さく）もう！」

エンジェル、上着を脱ぎ捨てる。

ロジャー「君が戻らなかった場合、救出に来るといっプランにはなっていないのか」

エンジェル「（自嘲）私のクライアントはそんなに親切じゃないの」

背を向けるエンジェル。

ロジャー「……」

ざっくりと開いたエンジェルの背。そこには赤黒い痣が。ロールシャッハ・テストの図柄の様でもあるが、それはまさしく小さな天使の羽根。

ロジャー「（呟く）エンジェル、か……」

夜のピア（イメージ的に）

幻惑的輝きを放つ海面を背に、魚人たちが棧橋の先へ来て、次々と海の中へ。

ロジャー「（オフ）漁師たちは、海の神の使いを畏れ、漁になくなったのだった。海の怒り、それがネゴシエーションも不可能な存在かどうかは、私自身が見ない限り、判断は出来ない」

ロジャー邸ノロジャーの部屋

ピアノを弾くドロシー。しかし、気が乗らないらしく、途中で止めてしまう。

ノーマン「（オフ）いやはや……」
ドロシー「？」

廊下を、ノーマンが工具を抱えて走っていく。

ドロシー「ノーマン？」

ノーマン、ひょいと戻って顔を出し

ノーマン「ロジャー様のお食事の御用意、先に始めていてくれ

ませんか、ドロシー」

ドロシー「今夜だって帰るか判らないのに？」

ノーマン「いつお帰りになっても備えておくものです。あ、

私はちょっと忙しいのでこれで」

さっと消えるノーマン。

小さく嘆息するドロシー。

傾いだオフィス

これまでで最も距離を離して座っている二人。

エンジェル「嘘ばっかり……」

ロジャー「何が」

エンジェル「ここには無尽蔵にメモリーが残されてるなんて、

大嘘もいいところだわ」

ロジャー「君は何の為にメモリーを探している」

エンジェル「 お金になるからに決まってる」

ロジャー「それだけ、か？」

エンジェル「 どういう意味」

ロジャー「君はこの街で生まれたのか」

エンジェル「（警戒） 何の関係があるのよ」

ロジャー「この街で生まれ、この街で暮らす人間はメモリーを

取り戻そうなどと思わないのが普通だ」

エンジェル「不安にならないの？ どうして私たちは今、ここで生きていて、あたしたちの親の親たちがどうしてしまったのか知らないままで」

ロジャー「それを考えない様にする事で、ドームの内側も外側も、今の生活を成り立たせている」

エンジェル「 あなたは違うのね」

ロジャー、立ち上がり

ロジャー「それにしても腹立たい」

エンジェル「何がよ」

ロジャー「この閉ざされた部屋で、身動きが出来ないでいるというのに、この私に女性が助けを請いすがりつこうともしない」

エンジェル「（笑い出す）最低な男だわ、あなたは」

ロジャー「前にも言われた事がある」

エンジェル、窓外を見る。

エンジェル「ここに逃げてきたの、生涯最大の失敗だわ」

工場街

市場の裏手にある、鉄錆の建築物。

旋盤の音が鈍く聞こえてくる。

ロジャー、「リーダーマン・ファクトリー」の看板を見上げ、その中へ。

リーダーマン工場

そう広くない工場内に、古い漁船が二隻、天井の

キャットウォークより鎖で下がっている。船底修理の途中らしい。

ロジャー「リーダーマンという人はいるか」

旋盤の音が止み、奥から屈強そうなポーランド人が出てくる。

リーダーマン「俺は入らない主義だつて聞いて来なかったか」
ロジャー「何に入るって？」

リーダーマン「あんた、保険屋じゃないのか？」

ロジャー「(苦笑)そう見えたのなら心底がっかりだ」

鉄のマグカップでコーヒーを不味そうに飲むロジャー。リーダーマンは船底修理を再開。

ロジャー「もしこのまま、海の怒りとやらが続いたらどうするかね。船に乗る者はいなくなる」

リーダーマン「知った事か。俺が出来る仕事はこれしかない。

漁師の連中が船に乗ろうが乗るまいが、俺は船を造るだけだ」

ロジャー「あんたが、面白い船を作った、という話を聞いているんだが……」

リーダーマン、作業を止めてロジャーを睨む。

リーダーマン「誰に、聞いたって？」

フラッシュノデイルの店

ロジャーを横目でチラと見るビッグ・イヤー。

ビッグ・イヤー「そのリーダーマンの船ってのはね、沈むんだぞうだ。おかしくないかね？ 笑わないのかね？

ネゴシエーター。船が沈んだら、船じゃない。しかし、浮かんでいてはとれないものが、南の海の中にはある」

リーダーマンの工場／裏手ガレージ

バツ、とシートを除けるリーダーマン。

はつきりとは見えないが、球体に近い鉄の塊のシルエットが露わに。

ロジャー「これが、船……？」

リーダーマン「俺の親父の親父のメモリーが、ぼんやりと俺の頭に残っていてね。どうしてもこれを作りたくなつたんだ。本当に水の中を潜れるのか、試してないがな」

ロジャー「これを借りたい」

リーダーマン「すぐには無理だ。充電しないとな」

ロジャー「今夜、また来る」

リーダーマン「(ニヤ)本気なら、前金をくれ」

ピア

ガレージ裏手はピアにほど近い。昏間だといつのに、もう濃霧が立ちこめ始めている。

ロジャー、出てきて通りのグリフォンに向かおうとすると、

ペタリ……ペタリ……ペタリ……

ハツと振り向くロジャー。

霧の向こうに、黒い人影がぼつと見える。

ロジャー「(眉を顰め)あれが、海の神の使いだ」と

三人いる。流れる霧の中で、チラと見えるその相貌！

ロジャー「馬鹿な……」

それはまさに、インスマスの……

ロジャー「神を騙る者め！(駆け出す)」

ロジャーに気づいた魚面の者達、ヨロヨロとした足取りで、次々と海の中へ飛び込む。

ロジャー「待て！」

彼らが居たところへ来るロジャー。

海面にはぶくぶくと泡が立つのみ。

慄然となるロジャーの視線は、沖へ。

ロジャー邸／ロジャーの寝室

黒いランニング姿のロジャー、黒い皮ジャケットを羽織り、ゴム底の靴を履いている。

ドアの外からじっと見つめているドロシー。

ドロシー「遠くへ行くの？」

ロジャー「ほんの数ブロック先だが、しかし遠くではある」

ドロシー「なぜなのつもり？」

ロジャー「(微笑) そうだな……、なぜなぞを解きに行く様なものかもしれない……。ノーマンには言っているが、今夜の夕食は要らないからな」

ドロシー「」

傾いだ部屋

ロジャー「夕食を食べて出れば良かったんだ……」

エンジェル「え？ 何よ」

ロジャー「(不機嫌そうに) 何でもない。大体君がいけないのだ。あの時強引にでも」

エンジェル「そんな事今更持ち出そうっていつの？」

気まずい沈黙……。

リーダーマンの工場裏ノ夕刻

ロジャー「(激昂) 何？ 私が借りると言ったじゃないか！」

リーダーマン「あの女の方が高い値をつけてくれたのさ」

悔しげに振り向くロジャー。

沖合に向かってゆっくり進む潜水艇。上部ハッチから顔を覗かせたのは

エンジェル「ロジャー・スミス！ いいもの見つけてくれた

わ！(投げキッス)」

ダツと駆け出すロジャー。

リーダーマン「一応二人乗りだ。仲良く乗りな(笑)」

ハッチのエンジェル、猛烈に走ってくるロジャーを見て狼狽。

エンジェル「ちょよ、ちょっと何する気よ！」

ロジャー、係留杭からジャンプ！

エンジェル、慌てて頭を引っ込める や否や、

ロジャー、飛び込む。

沈み始める潜水艇。ハッチが慌てて閉じられる。

潜水艇内

二人乗りというのは誇大表現というものだった。
極めて狭苦しい球体内に、不自然な態勢でいる

ロジャーとエンジェル。

エンジェル「これは私が借りた船なのよ！ 何で勝手に乗り込んでくるのよ！」

ロジャー「私の方が先に借りたんだ！ 私に権利がある！」

エンジェル「もし紳士を気取ってるなら降りるべきだわ」

ロジャー「そんな事より、おい！ぶつかるぞ！」

エンジェル「へっ？」

小さな丸窓の向こうに迫る、古いビルの避雷針。

エンジェル「くっ！」

エンジェル、身を擦らせ、操縦レバーを握って面
舵に回す。

海中

緩やかに進路を変える潜水艇。

透明度が低いながらも、海中埋没都市が広がる海
中の光景。潜水艇は深みへ。

海中のビルの幾つかの窓には灯が点っている。し
かし、当然、その中に人の姿などない。

潜水艇内

ロジャー「未だ電気が通じているところがあるらしいな」

エンジェル「まるで人が未だいるみたい……」

バン！ いきなり丸窓に魚面が貼り付く。

エンジェル「きゃあああああ！」

ロジャー「！ 神を騙る者の正体がこれか！」

魚面の鯖の様に死んだ目 そのレンズの奥には人間の目が。

ガン！ 潜水艇外板が破壊される音。水が接合部から滲み始める。

エンジェル「いや！ こんなところで死にたくない！」

ハッチを回そうとするエンジェルを止めて

ロジャー「よせ。この深度で生身で出たら水圧に潰される」

エンジェル「じゃあどうするのは 沈んでしまっわ！」

ロジャー、窓外下の、明かりが点いているビルを見る。

ロジャー「(モノ) 逃げ込めるのは、ここだけだった」

ロジャー邸ノダイニング・ルーム

テーブルについているのはドロシーだけ。

ロジャーの、食器だけがセットされた空席を見る

ドロシー。

ドロシー「……」

がちゃーん！ ガランガランガランガラン！

振り向くドロシー。

パイプだの金物だのを両手一杯に抱えてキッチンの方から慌ただしく出てくるノーマン。

ドロシー「(呟く) 男たちって……」

傾いだオフィス

傾いだ窓辺に立ち、海を見つめるロジャー。

エンジェル、側に来る。

エンジェル「ここで暮らしてたのね、40年前までは」

ロジャー「」

エンジェル「何が起こったと思う？」

ロジャー「この世の終わり、天変地異」

エンジェル「それでも、あたしたちは生きてるわ……。なりふり構わず……」

ロジャー、横目でエンジェルを見る。

ロジャー「(モノ)この天使を自称する女は、金の為にメモリーを探している。しかし、メモリーが金になる、という価値観自体、過去の記憶を失っている私達にとって、本当に意味を持つものなのか」

小さく吐息を漏らすエンジェル。

ロジャー「生きるという事は、なりふり構わない事じゃないのかな」

エンジェル「(微笑)優しい事も言えるのね」

ロジャー「……」

目を海に戻すロジャー、！

ロジャー「あいつらだ！」

エンジェル「！」

深部に小さなサーチライト群が浮かぶ。

ロジャー邸/テラス

海の方を見つめているドロシー。

ノーマン「(オフ)では、ちょっと出て参りますよ」

振り向くドロシー。

ニッカポッカの、まるで探検旅行にでも出るスタイルの、得意気なノーマン。

ドロシー「あたしが行くべきだと思うわ」

ノーマン、見る見る残念そうな顔に。

傾いだオフィス

窓外では、あの海上から見えた強い光が明滅。その周囲で潜水夫達がサルベージ作業をしている。

ロジャー「(モノ)あの海中で動ける服を着た男達は、エンジェルと同じ目的を持っていたのだろう。夜毎に輝くあ

の眩いメモリーの輝きにつられて」

エンジェル「とられてしまっわ！」

ロジャー「あの輝き、人が創り出せるものだろうか」

ずん！ 光の中心で水中爆破。煙の泡が昇る。

ロジャー「何が起こった……？」

爆発で水が濁り、窓外の視界が遮られる。

ドン！！

エンジェル「きゃあああああ！」

窓に突如押しつけられる、魚人。

ロジャー「！」

その潜水服の男は既に死んでいる。

窓にヒビを作りながら、ゆっくり沈んでいく。

ずずずずず 建物自体が揺れ始める。

エンジェル「何なの？」

ロジャー「メモリーの主が、目覚めたらしい」

エンジェル「こっ、こんなところにいたらダメよ！」

窓から飛び離れるエンジェル。

ロジャー、その隙に小声で腕時計に

ロジャー「ビッグオー」

ビッグオー／コクピット

コクピット内部はビニール・シートやゴムチュー

ブの類で応急防水処理が施されている。

操縦席ではドロシーが所在無げにぼつと座って

いたが、突如始動。

ドロシー「……」

水没都市／海上

おおおおおおおんんん 海神の目覚め。

錆び付いた異形の巨人が浮上。

地下鉄路線

ゴオオオオオオオ！ 猛進撃するビッグオー移送
貨車。壁を突き破り

傾いだオフィス

ドアを叩いているエンジェル。

エンジェル「手伝ってよ！ ここから絶対に出ないと！」

エンジェル、窓の方に振り向き、ギョー！

ロジャー、椅子を振り上げ、窓を割ろうとしてい
た！

エンジェル「な……」

ガシャン！ 窓が割れ、水が流れ込んでくる！

エンジェル「ひとでな……」

水に吞まれるエンジェル。

割れた窓の向こうには、ビッグオーの巨大な
シルエツト。

水没都市〜ピア

海神メガデウス、棧橋から地上へその姿を現す。

おおおおおんん！ 泣き声の如き、咆哮。

ビッグオーノコクピット

下部ハッチから昇ってきたロジャー、

ロジャー「ノーマンが乗っていたんじゃないか！」

ドロシー「あたしだったら空気が無くても平気なもの」

ロジャー「彼は今頃残念がっているだろうな」

阿吽でシートから入れ替わる二人。

ロジャー「ビッグオー・アクション！」

S「神の名においてこれを鑄造する

汝ら罪なし」

アウト・オヴ・シティ

スラムのビル街を踏み潰し、破壊する海神。泣き声を上げて。

ヘヴンズ・ゲイト（パラダイム本社ビル）

同ノプレジデント・ルーム

チューブ管のモニタに映るモノクロ映像。海神が暴れる姿を見ている、アレックス。

アレックス「潮で錆びたメガデウスなど無価値だ。メモリ

ーさえ引き上げられれば良かったのだ……」

アレックス、テレタイプ式通信端末に

アレックス「軍警察に、すぐに攻撃するかと告げる。ドームの

外の掃除をやらせるのだ」

海上へピア

ザバ！ ビッグオー、浮上。

栈橋に、そとエンジェルの軀を横たえさせる。

エンジェル「（目を薄く開け）ロジャー……？」

エンジェルの霞んだ視界にある、ビッグオーの顔。それは、市場を破壊しドームに向かって進む海神メガデウスの方へ目を向けている。

ビッグオーノコクピット

ロジャー「何を泣いているんだ、あのメガデウスは……」

ドロシー「自分が仕えていた主人がいない事によ」

ロジャー「……、しかしこのまま暴れさせる訳にはいかない」

アウト・オヴ・シティ

ドオオオオン！ 海神がビルを押し倒した。
逃げ惑う人々。

軍警察装甲車が到着し、ダストン飛び出す。

ダストン「マイルズ、キングート班、対メガデウス・ミサイル
で攻撃！」

部下「ダストン中佐！ 攻撃を待てとの命令です！」

ダストン「ふざけるな！ この状況で誰が止められるんだ！」

部下「 本社です」

ダストン、キツとなり遙か後方のドームを睨む。

ダストン「 ここは幾ら潰されてもいいというのか！」

おおおおおんん！ 装甲車前のビルが割れ、
海神が姿を間近に現す！

ダストン「！ 構わん！撃て！撃て！」

ミサイル、発射！

着弾し、海神の軀を覆う海草が燃えあがり、錆び
てフォルムの朽ちたボディが露わに。

ダストン「！」

海神のボディ、割れて、内部から見えるのは

ミサイル群！

ダストン「たっ 待避！ 待避だああー！」

ミサイル 発射！

ドオオオオオンン！

ダストン「？」

ミサイルを身を挺して遮ったのは、勿論BCOー！

ビッグオーノコクピット

ロジャー「It's showtime, folks!」

ドロシー「男って……」

ロジャー、右腕を振り上げ

アウト・オヴ・シティ

ビッグオーが繰り出す サドン・インパクト！

爆発！ 崩れ落ちる海神。

よろけながら、歩いてきたエンジェル、虚ろな目でその光景を見る。

エンジェル「やめて、頭は潰さないで。メモリーが……」

ビッグオーノコクピット

ロジャー「海の神、その中にどんなメモリーが眠っていたかは判らないが、それを利用しようとする者は、私の敵だ」

アウト・オブ・シティ

ビッグオー、今度は左腕のサドン・インパクトを頭部に放つ！

完膚無きまでに破碎される、海神。

パラダイム本社ノプレジデント・ルーム

爆発の煙を見つめ

アレックス「（苦笑）死者には敬意を表するものだよ、ネ

ゴシエイター」

アウト・オブ・シティ

海神の残骸を前に立つビッグオー、視線を下へ向ける。

そこには鉄の表情となったエンジェルが。見つめ合う、メガデウスと女。

以下次回